

平成24年度

**あいち多文化共生作文
コンクール入賞作品集**

【優秀賞（小学生の部）】

豊田市立西保見小学校 6年 今泉 彩 『私の友達』 P 1

【優秀賞（中学生の部）】

豊田市立保見中学校 3年 福岡 咲菜 『とっても身近な多文化共生』 P 2

【佳作】

豊田市立西保見小学校 6年 千代田 ミワ 『自分の生まれた国』 P 4

豊橋市立高師台中学校 1年 尾藤 はるな 『フィリピンからの転校生』 P 5

豊田市立保見中学校 1年 柴田 理姫 『「違い」はおもしろい』 P 7

豊田市立保見中学校 3年 松田 七海 『理解すること』 P 9

新城市立新城中学校 3年 白井 結花 『「人種」の壁を乗り越えて』 P 11

【優秀賞（小学生の部）】

私の友達

豊田市立西保見小学校 六年 今泉 彩

私の周りには、たくさん外国人の友達があります。そのおかげで、私たちのクラスは、とてもにぎやかで、楽しいクラスです。

でも、以前はぶつかり合うことばかりでした。それは外国の子は、日本人とは性格も話す言葉も違うことが原因でした。低学年の頃は、自分の言いたいことを主張することも少なかったので、けんかはありませんでした。でも、高学年になると、一緒に活動することが多くなり、言いたいことを言うようになりました。分かり合おうとすることがないまま、主張ばかりを繰り返し、お互いに不満がたまりました。そんな関係になってしまうと、外国の子同士がポルトガル語で話していると、悪口を言われているようで不安でした。私は、外国の子にかかわるより、お互いに距離をとっていた方がいいと思っています。

五年生の総合の勉強で、百年前の日本人が言葉も分からない中で、努力する姿でブラジルの人達と信頼関係を築いたことが、今の西保見小学校につながっていることを知りました。私は、百年前のブラジル人が、偏見を持たず日本人のよさを認めてくれたように、私たちもブラジル人の本当のよさをちゃんと見つめて、受け入れていかなければと思います。少し、自分の心が柔らかくなつたような気がしました。それから、ぶつかることはありませんでしたが、お互いが納得いくまで自分の気持ちを一生懸命に伝えるようになりました。

でも、やっぱり言葉の壁は大きく、何も問題を抱えていないのに日本人、ブラジル人のグループに分かれることがありました。今までだったら、平気だったことが、同じクラスなのに、ちよつと寂しいなと思うようになりました。そこで私たちのクラスでは、給食の時間に「日本語タイム」を作りました。みんなが分かる共通語の日本語で話すのです。一緒に給食の時間をみんなで楽しもうという気持ちになると、一生懸命に話して、一生懸命に聞いて、グループの仲間と盛り上がるようになりました。グループの誰もが、会話に参加し、給食の時間が、とてもにぎやかに楽しくなりました。

ブラジルの子には、「アレルタ」という遊びも教えてもらいました。友達作りができるおもしろい遊びで、みんなで夢中になっています。知らないうちに、私の世界が広がっています。よさに目を向けると、楽しいことがいっぱいです。

私は、外国の子のように、物事をはっきり言い、相手に自分の気持ちをきちんと伝えられるようになりたい、一つ一つのことを楽しんで取り組みたいと思っています。それに気づけたのは、身近に自分と違うよさをもった友達がいたおかげです。

今、私たちの間には、お互いのよさを認める気持ちが育っています。百年前からのお互いを信頼する気持ちを私たちもつなげていきたいと思っています。

【優秀賞（中学生の部）】

とつても身近な多文化共生

豊田市立保見中学校 三年 福岡 咲菜

私の通っている学校は、他の学校とは違う特徴があります。

それは外国人の生徒が多いことです。ブラジル人が特に多く、他にはスペインやペルー、韓国の子もいて、とても国際色豊かな学校です。

中学に入って3年目、最後の年を過ごしています。私はこの学校で今まで多くの外国人の子と過ごしてきて、たくさんのかことを学びました。

1年生、教室では聞いたことも無い言葉が飛び交っていました。何を話しているのか全然わからなくて、とても不安な気持ちになりました。でも、そんな不安はすぐ消えました。外国人の子が普通に話しかけてくれて、仲良くなれたからです。外国人の子はともフレンドリーで、優しいことがわかり、それからは自分からも積極的に声をかけるようにしました。

2年生の時の合唱コンクールはとても心に残っています。練習を始めたときはクラス全体的にやる気がなく、特に一部のブラジルの子は歌の途中で話したりするほどでした。私達が注意しても聞いてくれなかったので、先生に相談して、クラスみんなで話し合いをし、心を入れ替え、練習を再開しました。初めは歌なんて面倒と言っていたブラジルの子達も、自分達から

「歌おうー！」

と声を掛けてくれたり、歌う前にざわついていた時には

「雰囲気作るよー！」

と呼びかけてくれたりするようにになりました。そうして心を1つに頑張ってきた私達のクラスは、念願の優秀賞をとることができました。合唱コンクールが終わった後、達成感や感動、喜びなどから、涙を流す子がとても多くいました。その中に、あの初めはやる気のなかった子達も入っていました。そして、私に飛びついて来て、

「本当に良かった！うれしいよー！」

と言ってくれました。私もうれしくて涙が止まりませんでした。

このように私にはたくさんのおい出と共に、いろいろな経験をしてきました。

そして、3年生になった今、私は思うことがあります。「外人」は差別用語なのかという事です。

この前、友達と話している時に、

「そういえば“外人”って差別用語らしいね。」

と友達が言いました。私は無意識に会話の中で「外人」という言葉を使ってしまったっていました。もともと「外国人」や「外人」という言葉は、壁を作っているようだし、違いを表しているような気がして好きではありません。日本人の私がそう感じているのだから、言われる側の外国人の子達はもっと嫌な気持ちになってしまうのではないかと、その時気づきました。

社会の授業で「外人」という言葉について少し話し合ったことがあります。班で「外人」という言葉についてどう思うかを発表することになりました。私の班にはブラジル人の男子がいました。

「実際に、」外人「って言われてどう思う？」

とその子に聞くと、意外な答えが返ってきました。

「俺は特別って感じがしていい！」

と。私は、

「嫌な気持ちになる」

というような答えが返ってくると思っていたので、その答えには驚きました。

では、「外人」は差別用語にならないのか。そう疑問がうかびましたが、他の班の発表で

「差別されてる感じがして嫌。」

「外人だから・・・と言われるのが嫌。」

などと「外人」という言葉を嫌だと感じているという意見が多くありました。

私の班の男子のように「外人」と言われることが「うれしい」と思う人もいれば、「嫌だ」と思う人もいる。人にはいろいろな感じ方があります。結局、「外人」が差別用語かどうかはわからないけど、相手が嫌だと思ったら、それはもう差別していることになるのではないかと私は思います。もし私が外国人で、「外人」と言われたらいい気持ちにはならないと思います。自分がされて嫌なことは他の人にもしない。常に相手の気持ちを考えて発言や行動ができれば、みんな仲良く、揉め事もなく、毎日を楽しく過ごせると思います。

私は「外人」という言葉を使うのをやめました。

私の学校では男女、国籍、関係なく協力し合っています。いつからか、「外国人」だということをおぼえていました。今、いっしょに生活する中で、「外国人」と意識することとは一度もありません。みんな同じ仲間なのです。見た目なんかは関係ありません。大切なのは中身です。外見で人を決めつけるのではなくて、その人の中身をちゃんと知ることが大切だと思います。

私の通う学校はさまざまな国籍の人と関わることができる、とてもすばらしい学校です。みんな平等で差別されたりしません。そんな学校で過ごす、私の中学校生活は数倍楽しいものになっているに違いありません。

私はこの学校が大好きです。

【佳作】

自分の生まれた国

豊田市立西保見小学校 六年 千代田 ミワ

私の通っている西保見小学校には、多くのブラジル人が通っています。そして私もその一人です。しかし、ブラジル人の私ですが、今までずっと

「なんでブラジル人に生まれてきたんだろう。日本人に生まれてきたかったな。」

と思っていました。なぜかという、ブラジルの子は友達とのけんかの回数も多くて、「またブラジル人か。」

と思われるのが嫌だったからです。それなどが原因で、私は小学生になったころから一緒にされたくないと思い、ずっと日本の子達と一緒にいるようになりました。クラスでも、いつの日かブラジル人と日本人のかたまりができ、それが普通になっていて、一緒に遊ぶこともあまりありませんでした。もちろん私は日本人のかたまりにいて、そんな日が続くほど

「日本人に生まれてきたかったな。」

という思いが強くなっていきました。

そして、私が3年生になったころ、ブラジル人と日本人でけんかをしてしまい、結局は仲直りをしましたが、私はなんだか今までよりも、仲が悪くなったような気がしました。その夜、学校で起こったけんかのこと母に相談してみました。すると母に、

「友達は何人とかは関係なくて、ただ文化や性格が少し違うだけなんだから、それを受け入れれば仲良くできると思うよ。」

と言われました。しかし、私はその時に言われた言葉の意味を理解できませんでした。しかし考えてみました。クラスのブラジル人の子と話している自分はどんな表情をしているのか、私は笑顔になっていました。では、なぜ笑顔になっていたのか考えてみると、最初は嫌だった私も、かれらの親切さと陽気さと優しさで笑顔になっていたので。そこで私は三年生の時、母の言った文化や性格を受け入れるということは、逆にその良さをおたがいに見つけ合うということだとやっと分かりました。

そして、月日がながれいつものように学校に登校したら、なぜかクラスの空気が軽くなっていました。それは、みんなが仲良くしていたからでした。その時、私もブラジル人なのに、日本の子と仲良くできていたことに気がつき、仲良くできていたのもおたがいの良さを見つけ合ったからなんだと今なら分かります。そして、三年生の時に起こったけんかは、今まで伝えられなかったおたがいの気持ちを伝えられ、しかもそのけんかのおかげで、色々な国の人と仲良くなれるコツも分かることができたのでとても良いけんかだったのかなと思います。

六年生になった今も、みんな仲良くできていて、今はなぜ仲が悪かったのか、みんな不思議に思っています。私もこのようなことがきっかけで、自分の生まれた国や人の生まれた国なんか、気にならなくなりました。

これからも、色々な国の人と仲良くしていきたいです。

【佳作】

フィリピンからの転校生

豊橋市立高師台中学校 一年 尾藤 はる な

私が五年生の時、フィリピンから一人の女の子が転校してきました。その子は慣れない日本語で、「私の名前はアンジェリカです。」と言いました。それが彼女との出会いでした。

その日のうちに私たちは友達となり、一週間がたつ頃には、すっかり仲良くなりました。彼女がだんだんと日本語に慣れてくると、二人でいろいろな話が出来るようになりました。言葉が伝わらなかつたりして、困ることもありましたが、彼女との話はとても新鮮で、話していて楽しかった事を今でも覚えています。

私は彼女の通訳係でもありました。日本人の日本語はとても早口で、聞きとりにくいらしく、先生が、

「明日は給食が無いので、弁当を持ってきて下さい。」

と言つても、彼女は首をかしげるばかりでした。そこで私は、単語を一つずつ伝えていくという方法で彼女に意味を伝えていました。例えば、さっきの

「明日は給食が無いので、弁当を持ってきて下さい。」
という言葉を、

「明日、給食、無い。お昼ごはん、アンジェリカ、自分で、持って、学校、来る。」と、身振り手振り教えると、ようやく分かってきているようでした。

言葉が通じないということは、大変なことなんだなあ。

と、改めて感じさせられました。その分彼女は、私に英語をたくさん教えてくれました。私たちは、互いに話せる言葉を教え合いました。彼女が時々、汚い言葉を使っていたのは、私のせいかもしれない。と、少し反省もしました。

そんなこんなで彼女の日本語はみるみる上達し、文章まで書けるようになりました。けれど、やはり多少のまちがいはありました。特に、から、だからなどのまちがいが多かったです。でも私は、そんな彼女のまちがいがかわいくて、あえてそこには注意しませんでした。

そんなある日、授業の一環として、老人ホームへ行くことになりました。お年よりの人々とふれあうため、ちぎり絵や絵をかくなどの遊びを考えたりしました。

当日、私と彼女は同じ班だったので、担当の部屋が一緒でした。そこには、たくさんのお年よりがいて、私たちを歓迎してくれました。さっそく遊びを始め、絵をかく時間になりました。みんなそれぞれ仲の良くなったお年よりの人とふれ合っていました。一人だけ、ぼつんといすに座っているお年よりがいました。その人は、目や肌が青白く、体に障害を持ったお年よりでした。正直にいつて、みんな気がついていてはるけどかわりたくないようなかんじでした。私も内心は、そう思っているのが現実でした。しかし彼女は違いました。そのお年よりに寄り添い、しっかりと手をにぎり、一緒に絵をかき始めたのです。国柄が違うせいなのか、なんにしても、自分の小ささを思い知らされまし

た。

いつの間にか自分にもあった、差別や偏見の目に気がついた瞬間でした。そして、私も彼女につられるように、そのお年よりの手をぎゅつとにぎりました。心の中で、私は謝り続けました。三人でかいた絵は、どんな絵よりも価値のある絵に見えました。

この日の事は、多分一生忘れられないと思います。私はこの時、彼女にどんな人にも同じように接するということを学びました。差別や偏見の目は、自分の心まで汚くしてしまうということも、すべて彼女の純粋な心から学んだことです。

“アンジェリカ”という一人の女の子が、私にたくさんのことを教えてくれました。そしてさらには、私の考えまで変えさせられました。いつもやさしく、笑顔で、時にはよく泣いていたアンジェリカ。私の中でどんどん大きな存在となっていくアンジェリカ。しかし、六年生となり、クラスが離れてしまいました。

四月。私の誕生日に、彼女が手紙をくれました。そこには、ひらがなの多い文に少しだけ入った漢字やカタカナ。相変わらずの誤字や脱字。それでも一生懸命書いてくれたのが伝わってくる文。彼女が日本に来たばかりの頃を思い出しました。心がとても温かくなりました。手紙の内容は、彼女と私だけの秘密ですが、一文だけお教えしたいと思います。手紙には、私への感謝の気持ちと、最後に、

“私もしフィリピンに帰っても、あなたのことは絶対に忘れない”
と書いてありました。

その数ヶ月後、彼女はフィリピンに帰っていきました。彼女が教えてくれたこと、彼女との思い出、私も決して忘れません。彼女と出会えて良かったです。そして、またいつか会える日を夢んでいます。いつになるかわかりませんが、本当にもう一度日本で会えたら、

「お帰り。」

と、彼女を迎え入れてあげたいです。彼女にもらったあの手紙は、今も私の宝物です。

【佳作】

「違い」はおもしろい

豊田市立保見中学校 一年 柴田理姫

「多文化共生」

私は、この言葉を「多くの文化と共に生きる」というふうに解釈しています。

今、私がつまっている保見中学校は四つの小学校が一緒になります。私の通っていた小学校は「西保見小学校」です。西保見小学校は全校の60パーセントが外国の子の学校です。私の小学校は、クラスの半分以上が外国の子で、小学校6年間クラスがえもなく過ごしてきました。

小学6年生の時、私たちは、「みんなちがって、みんないい！」という、多文化共生をよびかけるビデオを作りました。このビデオの作成で「多文化共生」について、よく考えることができました。このビデオはいろいろな小学校にくばられ、感想をもらいました。保見中学校にくる小学校で伊保小と大畑小にもくばられました。伊保小や大畑小には、外国の子がほとんどおらず、西保見小とは全然違う環境でした。だから、

「中学校で外国の子と一緒に過ごすのが楽しみ！」

という感想が多くありました。その感想を読んだときはすごくうれしいと思い、中学校生活を楽しみにしていました。

中学校は、小学校とは全然違う環境で人数も多く、クラスも3クラスもあって、外国の子と日本の子の割合も全然違います。周りがほとんど日本の子で私は、少し違和感を感じました。小学校とは違う環境に正直ドキドキしていました。

日本人の私は、日本の子と一緒に話したり遊んだりしている方が楽しく感じる時があります。しかし、そのように過ごしていると、日本の子は日本の子と、外国の子は外国の子でかたまりはじめ、外国の子は、ポルトガル語やスペイン語で話すようになります。日本の子には分からない言葉で……。

この「わからない」ということで、人はものすごく不安になります。そして、日本の子と外国の子の間に大きな溝があるかのように区切られてしまいます。この溝は自分たちが作った境界線なのです。だから、日本の子と外国の子との間で人間関係の問題が起きたりすると

「だから外国人は……。」とか、

「日本人は……うだから。」

とか、違いを認め合えず、ぶつかりあうようになります。そうすると、溝はもつと深くなり、分かり合うことはもつと難しいと思うようになります。

「違い」とはなんでしょうか？

違いとは、わかりあえないもの、悲しいもの、いろいろ考えられると思います。西保見小で作成した「みんなちがって、みんないい！」のビデオでは、

「みんな同じだったらつまらない。顔も一緒、考えることも、苦手な事も一緒、それではつまらないし、助け合うこともできません。それにくらべて違いがあるからおもしろい、できる事・苦手な事が違うから助け合える」

こんなことを考えました。私も違うということ、すごくいいことで大切なことだと思えます。違いがあるからぶつかることもある、イライラすることもある、だけど、ぶつかりあったり、ケンカしたりしないといけないことある。それは生きていくうえで大切なことを学べる大事なことはないかと私は思っています。

西保見小の昇降口には、

「手をつなごう ぼくも私も 地球の子」

と書いてあります。低学年のころは不思議に思っていたこの言葉。「多文化共生」について勉強してからはすごく気に入っていた言葉でした。私たち人は、日本人・外国人と区切ることもできてしまうけど、みんなこの地球に生まれ、地球で暮らしている同じ人間なのです。地球はすごく、すごく、大きいです。宇宙からしたら、地球なんかほんの少しの小さな、小さな、星です。そんな小さな星の中で、「あれが違う」「これが違う」ってケンカしているのは、悲しいと思います。

生きている人、みんなが「地球の子」です。この地球の中に自分とすべてが同じ人なんていないと思います。

「みんな違ってみんないい!」

それぞれの違いを認め合い、違うからおもしろい、楽しいと感じれる人が多くなって「多文化共生」が、私は入った保見中学校の中で、もつともつと広がればいいなと思っています。そのために、外国の子との関係に慣れていない小学校からきた友達と、外国の子が「共生」できるように自分ができることはなんだろうと考えてみますが、言葉にすることは難しいです。でも、「みんなちがってみんないい!」という気持ちを忘れずに、学校生活を過ごし、いろんな行事と一緒にとりくんでいきたいです。

【佳作】

理解すること

豊田市立保見中学校 三年 松田七海

私の住む愛知県豊田市には、外国人登録者数が多く、いろんな国籍を持った人が多い県です。私が通う保見中学校にも、様々な国籍を持つ生徒が毎日、私と同じように学校へ通っています。

保見中学校には、外国籍を持つ生徒を主に学習面でサポートする教室や定期テストの前では、自ら応募する補習があります。そこでは、国際担当の先生が個人的に教えてくれます。そこには私の友達も通いますが、ほとんどの生徒は、自ら勉強をする、熱心な生徒ばかりなので、ほとんどの時間を日本国籍を持つ生徒と共に過ごしています。それに、とても皆となじんでいる気がします。

私もその一人です。生まれは日本ですが、父も母も外国籍を持っているので、私も外国人です。

皆となじんでいる中で、私がある外国籍の友達と話していた時、友達はあることを言いました。

「私も日本人のようになりたい。でも、皆と同じようになれないんだ。」

私はこれを聞いて、私自身、同じようなことを思ったことがあるな。そう思いました。一見皆と同じように過ごしているように見えても、実は皆になじみきれていない一面があることを知り、

「やっぱり大変なんだな。」

と思いました。もし、私が日本人だったら、この子に返す言葉は見つからず、困惑するでしょう。言えたとしても、

「私が外国で暮らしても、同じように考えるかもしれないね。」
こんなことしか言えないと思います。

私はこの時、友達に対する理解が今まで不十分だったことに気がきました。
なぜ十分に理解できなかったのか。

どうしたら理解を深められるだろうか。

この「理解」というワードは異なる文化を持つ人々と分かち合って生活していくための最大の鍵に違いありません。

そもそも、隔たりを生む原因は、

「自分は日本人だ」とか

「外国人だ」

といった無意識のうちに心の中に生じる意識があるからではないでしょうか。

でも、そんな意識など捨ててしまえばいいのです。

なぜなら、国籍や出身地など、細かなことの前に、大前提としてみんな地球に住む人間であることは決して変わることはない事実だからです。

なので日本人と外国人の違いも同じ人間なのだから、人の顔が個性豊かなように、人

にそれぞれの性格があり個性があるのと同じように「違い」ではなく一人ひとりの「個性」だと考えれば、日本人も外国人も同じです。

そして、私達が国籍など関係なしに分かち合うためには、先ほどの人間一人ひとりの個性を互いに深め合うと同時に、尊重することが大切だと思います。

日本で外国人が暮らすにあたって、ただ、移住した外国人が日本の文化や生活習慣に合わせるだけでは文化の一方通行になってしまいます。それに、日本人は合わせてもらうだけだから楽ですが、移住してきた側からすれば、大変な負担になります。

だから、私達も相手の国の文化を学んで、日本の文化を伝えることで互いの文化を学び、理解する文化の双方向の交流を進めていくべきです。そうすれば外国人は日本になじみやすくなり、日本人も外国の文化を受け入れやすい社会になると思います。

そして外国人と日本人の交流が盛んになれば、双方にとって暮らしやすい社会になるでしょう。

私は、多文化共生社会で鍵となるのは、「人を思いやり、助け合おう。」という気持ちだと思います。

人を思いやり、助け合うことに国境はありません。だから、誰もが子の気持ちを持つていれば、国に関係なく互いを理解できる。そして良い仲間にもなれる。

私はそう信じています。

【佳作】

「人種」の壁を乗り越えて

新城市立新城中学校 三年 白井結花

昨年の夏休みの少し前のことでした。父が、

「中国人をホストファミリーとして受け入れてもいいか？」

と唐突に言い出しました。私はその提案に反対でした。私は人見知りで、初めて会った人とすぐに打ち解けられないということもありますが、それよりも気になったのは、受け入れる人が中国の人だということでした。それまでの私の中国人へのイメージは、「怖い」「自己中心的」などマイナスなものばかりだったからです。そんな私の気持ちとは裏腹に、母と、外国に行ったことのある姉は、

「どんな食事にしようか。」

「今から片付けなくちゃね。」

と、すでに受け入れた時の相談をしていました。こうして、すんなりと中国人が私の家にホームステイすることが決まりました。

ホームステイの日は、朝から、中国の人が来るといふ不安と、打ち解けられるかという緊張が混ざってどきどきしていました。父に連れられ家に来た女性は、父よりも背が高く細身のきれいなお姉さんでした。笑顔の素敵な彼女の名前は朱晶といい、早速母と、漢字や絵で楽しそうに筆談を始めました。その様子を見て、私はうらやましくなりました。絵を描くことが趣味で、得意である私にとって、言葉の通じない国の人と絵という手段で心を通わせることに大きな魅力を感じたからです。思いきって私は、昔、渡来人が日本に伝えた中国の文化が基になって、今の日本の文化が生まれたことに対し、感謝の気持ちを伝えてみました。すると朱晶は、

「今の中国の経済的発展は、日本人が高度な技術を教えてくれたお陰よ。ありがとう。」

と、にっこり笑って答えてくれました。思いがけない朱晶の反応に嬉しくなり、私がつと、「中国は今、一人っ子を推進していますよね。」

と尋ねてみると、朱晶は、

「私は一人っ子で、幼いころさみしかったから、将来は二人の子どもを生み、育てたいと思っているよ。」

と自分の思いを教えてくださいました。また、ホストファミリーが集まりバーベキューをした時には、私のお皿に自分よりたくさんのお肉や野菜を盛ってくれました。

このような朱晶の日本に対する思いや優しさに触れて、私の中国人への印象はがらりと変わりました。今まで私が持っていた中国人への感情は、朱晶には伝えませんでした。素直に伝えて、謝りたい気持ちになりました。

私はなぜ、この時まで中国人に対して嫌悪感を抱いていたのでしょうか。

社会科の授業で習った中国と日本との関係は、決して暗いものばかりではありません。しかし、メディアがながす中国の情報が、いつの間にか私の心に中国人に対する悪いイ

メージをふくらませてしまったのだと思います。テレビから流れる中国の情報が正しいかどうか確かめずに、それが全ての中国人に当てはまると思い込んでいました。そして、中国人とはこういう人たちだと決めつけて、日本に住んでいる中国の人々に偏見を持っていました。スーパーマーケットや電車の中で大きな声を出し、笑いながら話す中国人を、不快に感じ、白い目で見ていました。また、中国人に限らず、日本で暮らす外国人を、私たち日本人とは違う、どこか別の世界の人たちだと無意識に区別していました。

しかしよく考えてみると、違う国で生まれ育った人が、違う常識や考え方を持っていることは当たり前だと気付きました。日本とは異なる常識や、考え方の相違ばかりに目を向けず、良い点を認め、また、日本人の常識や考え方を伝え、受け入れてもらうことが、多文化共生への第一歩になるのではないのでしょうか。私は、朱晶と人種の壁を乗り越え、ひとりの人間として心を通わせる交流をして、人柄や価値観について知ることができました。このような交流が増えることで、互いに対等な立場で同じ社会を創っていくはずだと、今回のホームステイから強く思いました。

今夏のロンドンオリンピックで、各国の若い選手が数多く活躍し、世界中の人々に感動を与えてくれました。多文化社会を築くにはオリンピック選手のように、私達若い世代が深く考え、国境を越えて団結し動いていくことが大切だと感じました。

私は、八月二十一日から二十五日までの五日間、新城市の代表として韓国へ海外派遣に出かけます。韓国との間にも、今までに様々な交流の歴史があります。それらを正しく理解したうえで韓国へと旅立ち、そこに暮らす人々を自分自身の目で見て、肌で感じ、多様な考え方と出会えることを楽しみにしています。そして、多文化共生のために、今自分出来る精一杯の交流をし、帰国後、韓国の良い所を多くの人に伝え、広げていきたいと思えます。